

町の南部に位置する久野脇区。^{くのわき}
良縁をもたらすといわれる「佐澤薬師堂」^{さざわやくしどう}があり、
恋愛成就にまつわる民話も伝わるなど、
「縁結び」にゆかりのある地区です。

ここに、その「縁結び」をテーマに観光客を呼び込み、
地域に元気を取り戻そうと活動を始めた住民グループがあります。
本号では、その取り組みを紹介し、関係者の思いに迫ります。



【特集】縁結びの里

くのわき

久野脇区に伝わる民話

昔、久野脇の名主・榎工門まきえもんの家に、おつまという一人娘がいました。

ある年の佐沢薬師堂の「ヒヨンドリ祭り」で、おつまは地名の甚太じんたという若者と知り合い、いつしか恋仲になりました。

しかし、二人の仲を知った榎工門は、おつまが身分の低い甚太と付き合うことはもちろん、会うことも許しませんでした。

それでも甚太に会いたいおつまは、毎夜こっそり家を抜け出しては薬師堂を訪れ、お薬師様に願掛けを続けました。

そしてある晩のこと、お薬師様がおつまの夢枕に現れると「明日の夕方、お堂の前に来るように」と告げました。



現在の佐澤薬師堂。お堂の横には、子孫繁栄のご利益があるといわれる「子持ち石」がまつられている。

それは、 対岸のにぎわい？

久野脇と塩郷の間の大井川に架かる吊橋、通称「恋金橋」^{こいがねばし}。塩郷側では、間近に見えるSLや電車を撮影しようとする人や吊橋の上からの景色を楽しむ人などで、連日のにぎわいを見せています。

しかし、もう一方の「たもと」である久野脇側までは、観光客の足がなかなか伸びていかないのが現状です。

「やっぱり、残念ですよね」。
筒井光夫さん(久野脇区)は、恋金橋を家族連れが楽しそうに渡る様子を眺めて、話し始めます。

「塩郷側から吊橋を渡りきった人のほとんどが、そのまますぐに引き返して戻ってきてしまうんですよ」。

塩郷側の恋金橋たもとで土産物店を営む筒井さん。久野脇の対岸から、そんな観光客の様子を見て、ずっと歯がゆい思いを感じていました。

筒井さんが久野脇側にも観光客が多く訪れるようになってほしいと願うのは、久野脇の未来に対する「危機感」を持っているからです。

「町内の他の地区と同じように、久野脇でも過疎化や少子高齢化が進み、地域から活気が失われていくのを感じています。もちろん、観光客が多く訪れるようになって、すぐに移住や人

口増加のような結果には直結しないかもしれない。でも、今から、外人から見ても魅力的と感じられる地域にしていくこと、そして実際に私たちの地域に足を運んでもらう機会をつくっていくことは、今後久野脇が存続していくために、とても意味のあることだと思うのです」。



経営する土産物店の前から、対岸の久野脇区を見つめる筒井さん。目の前の幹線道路は、たくさんの車が行き交う。



翌日の昼、榎工門の家では騒動が。代官所に届ける上納金の入った胴巻を、榎工門がどこかで落としてしまったようです。父のことが心配なおつまでしたが、こっそりと家を抜け出してお堂へ向かいます。するとそこには、甚太の姿が。なんと昨夜、甚太も同じ夢を見たのです。お堂に何度もお礼をした二人は、駆け落ちをしようと歩き始めましたが、その時、足元に榎工門の胴巻を見つめます。おつまから昼の出来事を聞いた甚太は、おつまを促して、二人で榎工門の元へ胴巻を届けました。胴巻を受け取り、すべてのいきさつを聞いた榎工門は、正直者の二人に感謝するとともに、今までつらい思いをさせてきたことを謝りました。そして甚太に、おつまの夫としてこの家を守ってほしいと頼みました。こうしてめでたく夫婦になった二人は、その後もよく働き、子どもにも恵まれ、家はますます栄え、末永く幸せに暮らしたそうです。

そんなことから、二人が胴巻を拾った渡し場付近は、いつのころからか「恋金」と呼ばれるようになりましした。